

潜道文子著
『関係をつむぐビジネス—Business for Society
経営の可能性』

(白桃書房, 2025年2月)

Review of Ayako SENDO's *Businesses that Foster Relationships:
The Promise of 'Business for Society' Management*

金子章予
Akiyo Kaneko

一言で言えば、美しい本である。何が美しいのか。

タウンファーザーの話から紐解かれる。タウンファーザーとは、その町の創設者やその町の発展に尽力した人々を賞賛した呼び名である。この言葉は、ちょうどアメリカが西部へと領土を広げていった19世紀中葉に使われ始めたことが確認されている。彼らは、自分たちの町のインフラを、国や誰かを当てにするのではなく、自分ごととして自分たちの手で作っていったのである。余ったお金で作られたのではなく、そこでは、社会的価値と経済的価値とが両立する形で町が形作られていった。

かつてできたのであったのなら、今だってできるはずである。実際、現在でも、社会的課題解決という社会的価値と同時に利潤という経済的価値も創出している組織は、少なからず存在する。企業の「社会的責任」という「義務」の概念を超えたものとして、山積する社会的課題を「自分ごと」として捉え、他者とともに自らができることを見出し、「当然のこと」としてそれに事業として取り込んでいる組織が存在する。著者はそのような組織を、著者自身が直接

訪れ、関係者にインタビューを実施して調査研究することにより、ますます巨大化し複雑化し混迷化していく社会的課題を解決するアクターとしての企業の可能性を追究している。

一般に、企業の活動目的は利潤の追求とされている。が、そもそも、それは正しいのか。利潤が無ければ事業が継続できないため、営利、非営利を問わず利潤は、事業のための条件である。しかし、企業活動の目的は、それだけではないはずである。一人の個人ができないことを成し遂げるためにこそ、企業は存在しているはずである。企業は、社会における他のアクターと同様、社会のために存在しているはずであり、そうであるからこそ存在を許されているはずである。企業は、利潤追求という目的のために存在していて、社会から信頼を得るために余力を社会のために使用する、という存在ではないはずである。

本書の重要な結論の一つは、社会的価値と経済的価値をともに生み出す企業が実在する、ということではない。もちろんそれも重要であるが、より重要なことは、企業が自らを社会課題の中に身を置き、新たなエージェンシー(作用)

によって新たな連関を生み出し、その多様な連関によってその社会課題を解決する糸口とする可能性である。すなわち、著者は、企業による多様な連関の創造に、現代社会における社会課題への突破口と希望を見出している。それは、社会と対峙するものとして企業を捉えるのではなく、また企業を中心として利害関係者との関係を考えるのではなく、多様なネットワークの

重要な継ぎ目の一つとして企業を捉え、それらの相互作用によって社会課題を解決に導こうとするものである。

本書はなぜ美しく感じるか。関係をつむぐことへ自ら身を置いた著者だからこそ、説得力をもって訴えてくるものがあるからである。関係をつむぐビジネスの可能性と希望を。